# 生徒・卒業生・若者の声

## オーストラリア留学を終えて

福井商業高校
二年国際経済学科
臺上　航大

二〇〇九年十二月十九日から二〇一〇年十一月二七日までの三百四十三日間を僕はオーストラリアの自然豊かな街で生活していました。日本を離れる前から英語には少々の自信があり、外国に行っても大丈夫だと思っていた僕にいきなり大きな壁が立ちはだかりました。その壁というのは、自分の思いを伝えられない、会話のスピードに自分の英語でついていけないということです。留学初日、いきなりベッドの中で泣いてしまいました。その次の日もそのまた次の日も僕は泣き続けました。四日目に、ホストファミリーのお母さんから一つの質問をされました。

「あなたはなぜ泣いているの？泣いているだけじゃ私は分からない」

僕は正直に思っていたことをお母さんに伝えました。すると「一生懸命になることは良いこと、でも楽しむことを忘れてはいけないと。せっかくオーストラリアに来たんだから英語はもちろん日本との文化の違いなどを楽しみなさい。」と胸に残るアドバイスをいただきました。僕はこのアドバイスを一年間胸に置いて生活したおかげで留学の一年を楽しめたのだと思います。

このお母さんとは一か月半生活をともにし、シドニーで行われる留学説明

会のため、家を出なければいけませんでした。

シドニーへ向かう朝、以前に言われたアドバイスと同じ言葉をもらい、胸が熱くなりハグをして家を離れました。

シドニーで行われた留学説明会には世界中から集まった留学生が参加をしていて二泊三日とロングスケジュールだったこともあり多くの国の人と話ができ、友達を作ることができました。ブラジルから来ている男の子が　サッカーボールを持っていたので皆でサッカーをしたりプールで泳いだり自国の話をしたりと、寝る間を忘れるほどこの時間を楽しむことができました。オーストラリアに来て初めて同世代の子と話す機会になり、へたくそな英語を使いながらお互いに友情を深めることができました。

シドニーでの研修を終え、遂に長期間滞在する家族に会う日がやってきました。

パパ、ママ、妹二人に、弟が一人の家族構成の中に入れてもらいました。年下の兄弟がほしかった僕にとって夢のような家族でした。しかしママとパパの年齢が若いこともあり家族内での喧嘩が頻繁にありました。つらい思いもたくさんし、喧嘩のたびに家の周りを一人で散歩するようにしていました。聞きたくない喧嘩のやり取りは実に理解しやすく、喧嘩の時に考えていることは日本人もオーストラリア人も同じなんだと妙に納得させられました。外国では家事はママの仕事ではなく家族でやることだと日本を離れる目からそう教えられていましたが、僕の家では誰も家事をしていませんでした。僕がするしかなくなり、皿洗い、洗濯物はすべてぼくがやっていました。日本では自分の部屋の掃除すらろくにしていなかった僕が家事のほとんどをこなしていました。

学校は家から徒歩二〇分の距離にあるcaboolture state high school（カブーチュアステート高校）に通いました。妹と同じ学年に入ったこともあり一日目から友達がたくさんでき、名前が覚えられないくらいになりました。

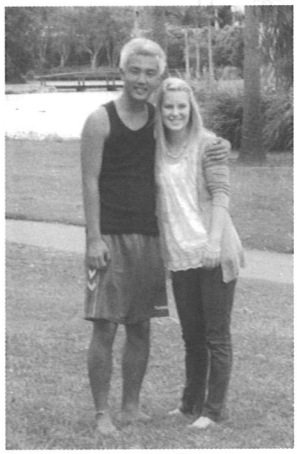
僕の学校には、幸い他に留学生がいなくアジア系の人も少なかったので最初はたくさんの人が僕に声をかけてくれました。しかし、僕は自己紹介をするだけで自分から話はせずに質問されることにだけ応答をしていました。この様な時間をすごしていくうちに僕の周りに友達はいなくなり、遂に一人になってしまいました。休み時間は一人で木の木陰で無駄に時間を費やし、授業の中でだけ会話を持つようになっていました。その生活が嫌で嫌でしようがなかったのです。自分ではどうすることもできませんでしたが、ホストの家族にはもちろん日本の家族に

も相談をしませんでした。家族を不安にさせたくなかったのです。

ある日、男の子が僕たちのグループに昼ご飯を食べに来いよと声をかけてくれました。これが僕と親友アレンのであいでした。アレンは僕のことを心配してくれていたようでした。その日から男友達とランチタイムにサッカーやクリケット、ラグビーという様々なスポーツをするようになりました。アレンが声をかけてくれてから僕の学校生活がまた変わりました。アジア人は人に流される、自分の意見を持たないとよく言われました。それでももう友達を失いたくないという一心で僕は英語を話し続け、言いたいことは全て言いました。たとえそれが喧嘩に繋がろうとも自分の意見は相手に伝えました。同じ学年から友達が段々と増えていき、帰国の頃には学校中の皆が僕の名前を知っていて僕もほとんど全員の名前を覚えていました。caboolture の学校に行けて本当に良かった。皆に出会えて本当に良かった。帰国最終日まで僕は学校に行き続け、飛行機のフライトがある日も学校に通い皆との思い出を作り続けました。目標だった百人の友達を泣かすことはできなかったけど多くの友達が僕のために涙を流してくれて本当に悲しかったですが幸せに思えました。

オーストラリアでの僕の一番の思い出は、オーストラリアで過ごす最後の日曜日のことです。その日はバーベキューをするとパパから伝えられていました。友達から来てもいいかと聞かれていたのでバーベキューに招待していいかとパパに聞いてみました。ですが、パパは家族だけで楽しみたいと断られてしまいました。

友達にも来られないと頭を下げてあやまりました。友達との思い出をもっと作りたかった僕は行きたくない思いで最後の日曜バーベキューに行きました。すると時間がお昼になるにつれて仲良しの友達が一人、また一人と顔をだしてきました。

パパが密かに僕のために、サプライズパーティを計画していてくれました。二〇人ほど友達が来てくれて大きなパーティーとなりました。本当に幸せな週末を帰国前に過ごすことができて嬉しかったです。

最後に、この留学に行かせてくださった家族、支え続けてくれた両親、僕の背中を押してくれた担任の先生、そして、オーストラリアで出会うことのできた全ての人に感謝の気持ちを伝えたいです。これからも、英語の勉強を続け、残りの高校生活を有意義なものにしていきたいです。